

海外出張報告

国際炉物理会議PHYSOR-2008

原子力研究所 橋本憲吾

国際炉物理会議PHYSOR-2008が昨年9月14日から6日間の会期でスイスのインターラーケンにおいて開催され、理工学部の大澤孝明教授、大学院生の谷中裕(D2)・三好温子(M1)両君とともに出席した。インターラーケンは、ユングフラウやアイガーなどの名峰の麓にひらけたスイスでも屈指の

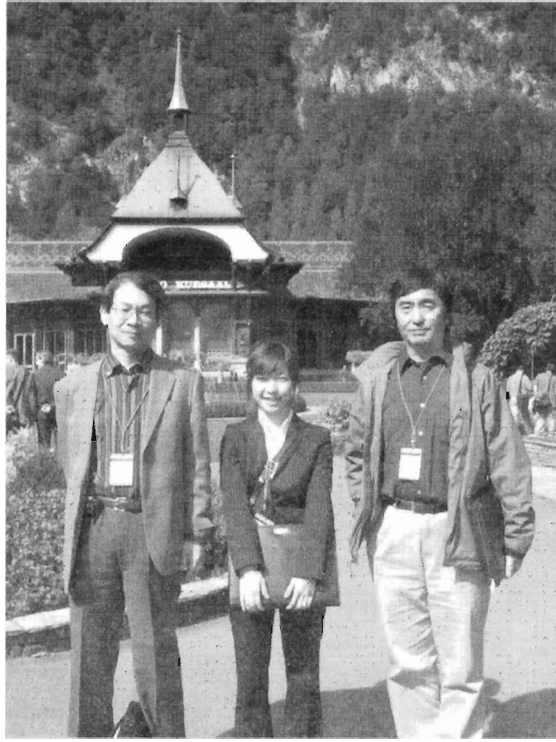
観光都市であり、スイスの自然を十分に満喫することも我々の会議出席の大きな目的であった。出発前に予想した通り、発表は600件を超え会議出席者も1000名以上に達し、原子炉物理界の最大のイベントに相応しい盛大な会議となった。



ここで、院生の発表内容について紹介したい。両君とも近畿大学原子炉を用いた実験研究に関する発表であり、谷中裕君は、中性子源の急速引抜きおよび挿入による反応度測定について発表した。原子炉起動用の中性子源を反応度測定ツールとして利用したもので、近畿大炉ならではのユニークな測定手法である。彼は2年前のバンクーバーでの前回国際会議で既に発表経験があり、国際会議初体験の三好君の発表準備を指導しながら自らの発表についてもしっかり準備していたようである。三好君は、原子炉雑音解析の一種である中性子相関解析による原子炉熱出力測定について発表を行った。中性子検出器の時系

列データ解析から熱出力の絶対値が決定しうるエレガントな手法であると考えている。彼女は、外国の研究者との議論は初めてであり、緊張のあまり青ざめていたようである。しかし、発表が終わると元気に国際会議への再度挑戦をぶちあげていた。

今回の会議は、大学院生両君にとっても世界に眼を開く良い機会になったものと信じている。今後とも、原子力研究所の若手教員や大学院生が国際的な会議に出席できるよう、我々年長教員は彼らを激賞し支援する義務があると思っている。近畿大学原子炉の存在意義を世界に知らしめるためにも……。



大澤先生と三好君と会議場にて